

『トレーディング家族ゲーム』

作・澤田金太

【登場人物表】

掛札マコト（45）

掛札リカコ（46）

掛札ミツル（21）

掛札ヒカル（17）

御田寺（24）

島本（マジシャン）（36）

ミキ（ラヴァース）（25）

山田（ハイエロフアント）（26）

岡（デビル）

浦沢（ハングドマン）

酒井（ハイプリエステス）

ストレンジス

ジャステイス

ハーミット

テンパランス

烏天狗

○渋谷駅前

スクランブル交差点の歩行者信号が青に変わり、無数の人々が歩き出す。広場には企画撮影中のユーチューバー。日本人の墮落を訴えかける政治活動家。自撮り棒付きスマホでセンター街方面を撮影する外国人観光客。満杯の喫煙所で窮屈そうにタバコを吸う喫煙者群。呆れたようなモヤイ像の顔。

○その、ほど近く

ビル一棟がまるごと店舗になっている大型のディスプレイストア、  
「キングフル」に人が吸い込まれていく。

○キングフル・販売フロア

間の抜けたテーマソングがBGMに流れている店内。

雑多な商品が所狭しと並べられた販売フロアには人、人、人。

人種も言語も様々な買い物客が商品を手にとって眺めたり、笑ったり、スマホで撮ったりしている。

道化師の恰好でフラダンスを踊る公式キャラクター「ヘルフルくん」が商品のPOPで値下げ価格をアピール。その文言、

「おバカだからいつもフル特価！」

× × ×

レジ――

十台弱のレジがひっきりなしに客を捌いている。

入って来る客と出て行く客でレジ前・エントランスは大混雑。

## ○同・事務室

何台ものモニターが店内の様子を映し出している。

装飾品フロア主任の掛札マコト

(45) がエントランス前のレジを  
モニター越しに眺めている。

マコト「忙しいから、気付かれないと思っ  
た？」

マコトが振り返ると、そこにはパイプ  
椅子に座って縮こまるバイト店員・

浦沢がいる。

マコト「警察は呼ばないけど、立派な犯罪  
ですよ。何か買うつもりだったんですか、  
レジから抜いた一万円で」

浦沢「生活が苦しくて」

マコト「それはでも、関係ないですよね」

表情に怒気を滲ませて、マコトを見る  
浦沢。

マコトは表情一つ変えず浦沢を見つめ  
続ける。

○同・装飾品フロア・バックヤード

パソコンでPOPを作成している店員

山田（26）に、マコトは一枚のタロットカードのようなものを差し出す。

マコト「これ、なんだと思う？」

山田「ああ……主任、どうしたんですか、これ」

マコト「浦沢くんがさあ、これでトレードしようって。断ったけど置いてっちゃった」

山田「え、レジ金の着服見逃してくれってことですか？」

マコト「らしいよ。考えられる？」

山田「（笑）考えられないっすね」

マコト「考えられないですよ」

カードを手に取って眺める山田。

山田「へグレモリア、今流行ってるトレーディングカードゲームっすね。3階に売ってますよ」

○地下鉄駅A・プラットホーム（夜）

駅員が大声で終電発車のアナウンスをしている。

階段を駆け下りてきたマコトが停車中の列車に滑り込む。

○地下鉄・車内（夜・移動中）

ぎゅうぎゅう詰め of 車内に苦しそうな表情をしたマコトの姿。

○地下鉄駅B・エスカレーター（夜）

長いエスカレーター。左側に乗っているマコトは立ちながらうつらうつら舟を漕いでいる。

その横を大勢の人間が通り過ぎて行く。

○住宅街（夜）

あくびをしながら歩いているマコト。何気なく側方に目をやると東京スカイツリーが見える。

○マンション・掛札家・玄関く居間（夜）

照明の落ちた室内。

鍵を開けてマコトが入ってくる。

マコト「ただいま」

返事はないが、マコトは気にしない。

居間に入ると冷蔵庫を開けてペット

ボトルの炭酸水を一口。

一息ついて振り返ると、スーツを着た

ままの妻のリカコ（46）が暗闇の中に座っているのが目に入る。

マコト「うわびっくりした」

リカコ「おかえり」

マコト「どうしたの」

リカコ「ねえあなたさあ、最近ミツルと話した？」

マコト「なに、藪から棒に」

冷蔵庫から冷凍食品を取りだしてレン

ジに入れるマコト。

マコト「電気ぐらい点けたら」

マコトは電気を点ける。

リカコ「さつきトイレから出てきた時に顔

合せてびっくりしちやった。丸坊主」

マコト「丸坊主？」

リカコ「うん。自分でやったみたい。もう掃除するの大変だったんだから、洗面所」

マコト「ふうん」

リカコ「ふうんじゃないじゃん」

マコト「ええ？」

リカコ「おかしいと思わない？」

マコト「え……髪切っただけでしょ」

リカコ「そうだけどさあ、今までこんなことなかったじゃない」

マコト「心境の変化じゃないの。良い徴候かもよ。ニート生活脱出の第一歩。一年か。

珍しいことじゃないよ。多様性万歳の世の中だ」

レンジがチンと鳴る。

マコトは暖まった冷凍食品を取りだし、テーブルに置いて食べながら、

マコト「考えすぎなんだよ。ヒカルの真似でもしたんじゃないか。そういえばヒカルの進路って決まったの？」

リカコ、呆れたようにマコトを眺める。

○満員の通勤電車にマコトが乗っている

○キングフル・装飾品フロア・レジ（朝）

山田がレジに立っている。

その背後ではマコトがあくびをしながら不良返品の赤伝を切っている。

山田「遅番の後に早番キツイっすね」

マコト「浦沢さんの代わりが見つかるまでのことだから」

山田「（売り場に）いらっしやいませー」

マコト「そういえば山田くん、今年でいくつ？」

山田「俺ですか？」

マコト「うん、俺」

山田「今年26っすね」

マコト「26かあ」

山田「26っすよ」

マコト「あのさ、これちよとしたアンケート

トみたいなものなんだけど、例えばの話、  
今自分がその歳でニートだとしたら山田  
くん……どんな感じ？」

山田「どんな感じ？」

マコト「ああ、いや、感じっていうか……  
なんていうかなあ……」

山田「リストラですか？」

マコト「え？ いや、あの……」

山田「退職勧告？ 懲戒解雇？ 俺……何か  
しました？」

マコト「いやいや、そういう話じゃなくてさ、  
そういう話じゃないんだけど……逆になん  
でその発想出てくるの？」

間。

山田「（売り場に）はいごゆつくりご覧くだ  
さいーい」

マコト「オッケー。今の話、お互いに無かつ  
たことにしよう」

山田「そっすね」

○マンション・ベランダ側の外観（夜）

マコトの声「ただーいまー」

最上階中央、掛札家の入っている

1005号室の居間の明かりが点く。

○同・掛札家・台所（夜）

夕食を作っているマコト。

と、玄関が開く音。

ドスドスと音を立てて着崩した制服に坊主頭という姿の掛札家長女・ヒカル（17）が冷蔵庫に牛乳を取りにやってくる。

マコト「おかえり」

ヒカル、舌打ち。

マコト「その仕打ちはないだろう」

ヒカル「お父さんが作るとさあ、なんかクツ

サイんだよメシ。食う気なくすわ」

牛乳をラッパ飲みしながら自室に戻っ

ていくヒカル。

マコト「じゃあ自分で作りなさいよ……」

× × ×

ミツルの部屋の前――

エプロン姿のままドアをノックする

マコト。

マコト「ミツルー。ご飯できたよー。食べないなー。うんわかった冷蔵庫入れとくから後でチンして食べてなー」

× × ×

居間――

マコトとヒカルがテレビを見ながら食事をしている。

マコト「あのさ、ヒカルさ、うーん、進路とかさ――」

ヒカル「ああそういうのいらなから」

マコト「ん？」

ヒカル「そういう親っぽい会話？ 求めてないから」

間。

マコト「603号室、そういえば新しい人入居したらしいよ。怖くないのかな」

マコト「首つり自殺の事故物件なんて」

ヒカル「飯時に何話してんだよ黙ってるよ」

マコト「すいません……」

水洗トイレを流す音。

二人が食事を続けていると、トイレ

から出てきた掛札家長男・ミツル

(21)が居間に入ってきて、冷蔵庫

から自分の分の食事を取りだしてテ-

ブルに並べだす。

キョトンとした表情のマコト。

マコト「手伝おうか？ いや、いつも部屋で

食べてるからいいかなと思って……一緒に

食べるんなら言ってくれたらよかったんだ

けどなあ……」

ヒカルの横に座って冷えた料理をその

まま食べ始めるミツル。

少し椅子を離すヒカル。

マコト「温めた方が……温めなくていいか、

そうだな、うん、食べたいように食べたら

……ね」

無言の食卓。

ヒカル「(テレビを見ながら) カルトだ」

マコト「ん？」

ヒカル「カルトゲーム。うちのクラスにもクッソ気持ち悪い信者がいる。いい歳こいて休み時間ずっとやってる」

マコトがテレビに目をやると、グレモリアにハマるカードゲームのオタクを面白おかしく紹介するバラエティ番組がやっている。

画面に映る大アルカナのカード。

マコト「これ、お父さんこの前――」

ミツル「カルトじゃない頭脳スポーツだ。

知らないなら黙ってる。グレモリアはマジック・ザ・ギャザリングと並ぶトレーディングカードゲームの元祖で世界中にプレイヤーがいる。タロットをモチーフにしてるからタロット発祥の地のフランスやイギリスでは競技人口がギャザリングを越えるし世界大会の規模も同じぐらいある。ワール

ドチャンピオンシップ東アジアブロックの優勝賞金だけで5万ドル、世界チャンピオンになれば15万ドルの賞金が出るしスポンサーも付くからグレモリアだけで生計を立てているプロもいるんだ。お前に何がわかる腐れビッチが」

引きつった表情でミツルを見るヒカル。ミツルは皿と箸を持って部屋に戻っていく。

ボタンとドアが閉まる音。

ヒカル「……喋った」

マコト「そりゃ、喋ることもあるだろ……」

### ○同・寝室（夜）

ダブルベッドにパジャマ姿で横たわって、浦沢から渡されたグレモリアのカードを眺めているマコト。

そのカードはタロットの大アルカナ、

〈魔術師〉のように見える。

マコト「さつきミツルがさ、珍しく喋ったんだよ」

マコトの傍らで、膝にノートパソコンを置いて何か打ち込んでいるリカコ。

リカコ「なんて言ってた？」

マコト「カードゲームがすごいらしい」

リカコ「なにそれ」

マコト「うーん……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：遅くなったね」

リカコ「うんちよつと、セミナー通ってて。

隣の酒井さんがどうしても言うから

断れなくて」

マコト「ふうん」

カードを裏返してみるマコト。裏側はセフィロートの木を模した絵が描かれ、ヘブライ語の何か警句のような一文が添えられたデザインになっている。

○キングフル・玩具フロア

什器に並ぶグレモリアのパックを

眺めているマコト。

男の声「掛札くん、やるの？」

振り返ると副店長・岡野がニヤニヤとマコトを見ている。

岡野「グレモリア、やるの？」

マコト「あ、副店長……いやあの、息子が」

岡野「ハマっちゃった」

マコト「はあ、よくわからないですけど」

岡野「ああ。大変だ。お金かかるよお」

マコト「え、そうなんですか」

薄っぺらいパツクを、厚みを確かめるように触ってみるマコト。

岡野「そうよ。今度ウチでも専用スペース

置いたらどうだろうって店長と話してる  
ところ」

マコト「へえ……これが」

岡野「今度感想聞かせてよ。どんな具合かさ。

参考にするから。ね」

マコト「はあ」

○渋谷の街（夜）

帰路につくマコト。

グレモリアのポスターが軒先に貼られたカードショップの前を通り過ぎて、ややあってから店の前に戻ってくる。ポスターを見つめる。

○カードショップ（夜）

マコトが店に入ってくる。

店の入り口付近にはカードゲームの新品や関連グッズ、中ほどにはショーケースに入った中古カード、奥にはデュエルスペースが設けられており、そこから対戦にあけられる若者たちの喜びの声や嘆きの声が聞こえてくる。マコトは物珍しげに店内をブラつく。と、ショーケースに差し掛かって、その中を覗いてみると、一際目立つグレモリアのカードがある。

大アルカナ（愚者）、キャプションに

は「ムーア版 ニアミント ※こちらはサンプルとなります。ご購入の際は店員までお申し付け下さい」とある。マコト、その値札を見て目を丸くする。

マコト「6万8000円……」

咄嗟に、浦沢のカードを取り出して見つめるマコト。

× × ×

買い取りカウンター――

店員が慣れた手つきで浦沢のカードの品定めをしている。

店員「1万5000円」

マコト「1万5000円！」

店員「ミントならね。これはもう、ヤケ、折れ、シミ、削れ……全部あるから。そうですねえ、うーん、5000円」

マコト「5000円……」

店員「懐かしいな。1999年の世界大会の参加景品ですね。貰い物ですか？」

お客さんの持ち物には見えないけど」

○マンション・掛札家・ベランダ（夜）

タバコを吸いながらスカイツリーを  
眺めているマコト。

○同・エントランス前（夜）

ゴミ袋を手に出てきたマコトが屋外の  
ゴミ捨て場に向かう。

女の声「困るんですけど」

びくつとして振り返るマコト。

首にタオルを巻いた隣人の中年女・

酒井が懐中電灯でマコトを照らして  
いる。

酒井「ゴミは回収日の朝に出すよう書いて

ありますよね」

マコト「すいません酒井さん、あの、つい

忘れてて……次から気をつけ——」

酒井「ベランダも禁煙って知ってますよね」

マコト「ああ、その……」

酒井「全部ウチに風で流れてくるんです。

ガンになったらどうしてくれるんですか」

マコト「すいません。本当すいません」

頭を下げてすぐごとマンシヨンの  
中に退散するマコト。

カメラに入り口前の壁に刻まれたマン  
シヨン名が映り込む。へツリーライフ  
月島へ。

○カードシヨップ（夜）

レジにグレモリアのブースターパック  
を何個か置くマコト。

マコト「あの、これだけあればできます？」

どこかバカにしたようにマコトを眺め  
る店員。

店員「あー、これだけだと……色々ルール

とかあるんで……スターターセット付きの  
初心者イベントなら隔週水曜でやってます  
けど」

マコト「あ、そうですか……そうですよね、  
すいません」

パックを棚に戻そうとするマコト。

店員が店の奥にあるデュエルスペースを指差す。

店員「よかったらどうぞ、見学」

マコト「あ、はあ、どうも……」

言われるがまま、マコトはデュエルスペースに入っていく。

若い男を中心に十数人の男女が一心不乱にカードゲームで対戦をしている。

山田の声「よっし」

見ると、表情に笑みを浮かべた山田が対戦卓にいる。

対戦相手「サイドイン弱かったかなあ」

山田「メタゲームつすよメタゲーム」

山田、マコトに気付く。

山田「主任」

マコト「山田くん」

× × ×

マコトと山田が対戦卓についている。

卓にはグレモリアの山札と手札、

美しい装幀の薄い本が置かれている。

山田「これがデツキ、山札。枚数は最低

40枚でそれ以上は何枚でも構いません。

でこの本は時祷書って言います。ま説明は  
おいおいするとして、プレイに必要なのは  
ひとまずこれだけです」

メモを取るマコト。

マコト「なるほど。あの、ジトウシヨって  
いうのは……」

山田「時間のジに祈祷のトウ、書物のシヨ。

ほらあの、中世ヨーロッパの、なんか

キリスト教徒の日課みたいのが書いてある  
やつだったかな？ 元々は」

マコト「へえ」

山田「まあいいや。で、ゲームの目的なんで  
すけど、タロットがモチーフのゲームって  
知ってます？」

マコト「うんうん、テレビで見た」

山田「じゃ話が早い。要はタロットって大  
アルカナが22種類あるんです。たとえば  
月、ムーンとか、戦車、チャリオットとか。

あと愚者、フルとか。でグレモリアはこの大アルカナ22枚のうちフルを除く21枚をどっちが先に場に並べられるかを競うゲームです。3回勝負が基本で2本先取した方が勝利。簡単に言えば」

マコト「花札みたいなもんだ」

山田「うくん、まあ、そつすね」

山田、山札からカードを1枚引いて手札に加える。

山田「プレイヤーはまず自分のターンの始めに山札からカードを1枚引きます。で、」

手札から教皇のアルカナを一枚場に出す山田。

山田「手札にアルカナがあれば1ターンにつき1枚、場に出すことができます。この場に出した時なんですが、カードにも書いてありますけどアルカナごとに特定の効果を場に及ぼします。たとえばこのハイエロファントなら場に出たときに山札からカードを3枚引く」

山札のカードを3枚手札に加える山田。

山田「アルカナを出す順番は自由ですけど状況に合わせたアルカナを出すことでゲームを有利に運べるってわけですね」

マコト「ウーン」

山田「ちなみに手札の上限は7枚。ゲーム開始時には山札から7枚引いて手札にしますから、ハイエロフロントを場に出して6枚、顕現効果で……あ、顕現効果っていうのはカードが場に出たときに発生する効果のことです。すいません」

マコト「いえいえ」

山田「で、ハイエロフロントでカードを3枚引いたので今の手札は9枚です。ターン終了時に手札が7枚になるまで捨てないといけないので、ま、こういう状況では別の大アルカナを出した方が基本的には有利ってことですね。着いて来れています？」

マコト「大丈夫大丈夫、バッチリ。続けて」

山田「さて、ここからがグレモリアの本番です。さつき主任、花札みたいって言ったじゃないですか。グレモリアもある意味では役を作っていくゲームで、場に出したアルカナの並び順に意味があるんです」

手札から女教皇のアルカナを場に出して教皇の隣に並べる山田。

山田「ハイプリエステスの顕現効果は墓地に置かれたカードを3枚手札に戻す。これでさつき捨てたカードを回収することができます。で今、場には2枚のアルカナが並んでるじゃないですか。ハイエロファントとハイプリエステス。あー、教皇と女教皇ね」

マコト「うん並んでるね」

山田「グレモリアにはアルカナの他に使い魔と呼ばれるカード……これはタロットでは小アルカナに当たるわけですが、ま要はクリーチャーですな」

マコト「……クリーチャー」

山田「わかりませんか？ クリーチャー。うーん、なんて説明すればいいのかなあ……戦うわけですよこいつらが。戦って相手の場のアルカナ奪ったり自分の場のアルカナ守ったり——」

マコト「あ、大丈夫、なんとなくわかったから。次行きますよう」

不満そうな山田。

山田「とにかく、使い魔、秘術、それから呪物、この3種類のカードがアルカナの他にありまして、これをまあ上手く使うことでゲームを有利に運べるわけですが、アルカナと違ってこの3種類は場に出すのに条件があります。それが場のアルカナの並びで、たとえばこの使い魔は召喚条件がハイプリエステスと他1枚のアルカナが自分の場に並んでいること」

〈信心深い侍女〉という名前の使い魔カードをマコトに見せる山田。

マコト「オー」

山田「今ならハイプリエステスとハイエロ  
フロントが並んでいるので場に出せるわけ  
です」

マコト「なるほど」

山田「一方この〈星辰の信奉者〉は召喚条件  
がハイプリエステスとムーンが隣接してい  
ること。だからこのアルカナ配置では場に  
出すことができません」

マコト「ああ」

山田「アルカナの並べ方ですけどこれも  
ルールがありまして、最初の1枚以外は必  
ず既に場に出ているアルカナの上下左右、  
または半分だけ接する形で置かないといけ  
ません。こんな感じですね」

教皇の横に並んだ女教皇を縦に少し

ズラす山田。

山田「こうするとどうなるかというと、それ  
ぞれのアルカナにとって半分だけ隣接した  
もう一方のアルカナがその他のアルカナと  
してカウントされます。わかります？

例えばハイエロフロントとハイプリエステスの2枚の隣接が召喚条件になっているカードはこの状態では場に出すことが出来ません。でもハイエロフロントとそれ以外の1枚が隣接していることが召喚条件になっっているカードは出すことが出来ます。デッキ構成や使いたいカードの召喚コストによつてはこういうトリッキーな配置も必要になってきました、ま、初心者は無理に狙わない方がいいですけど覚えておいた方が良いつて感じですね。えーちなみに、同じアルカナは場に1枚しか出せませんがデッキには何枚入れても可です」

山田「じゃ2枚目以降はどうなるのかというと、場に出た時に既に場に出ている方のアルカナは墓地に送られて、そこ以外の場所に新たに置くことになります。これは頻繁に使うテクニクなので覚えておいて下さい」

楽しそうに時祷書を手取る山田。

山田「それから時祷書。これは何かといいますと自分のターンにここに書かれた特定の行動をすることで追加でカードを引くとか、通常は1ターンに1枚しか出せないアルカナをもう1枚出せたりとかボーナスが得られます。

時祷書はゲーム開始時に山札とは別に用意して場に置いておくことができます。自分ほちなみにハイエロファント・デッキなので「アウグステイヌスの時祷書」を使って「アウグステイヌスの時祷書」を使っているんですけど、これも色々種類がありますから自分のデッキに合せたものを用意するのがポイント。アウグステイヌスなんかはデメリット効果はないですけど時祷書によっては条件達成時のボーナスが大きい代わりに条件が達成できなかった場合にデメリットがあつたりしますんで、まあデッキと睨めっこしてって感じですね。

ただし時祷書は公開領域にあるわけですから当然対戦相手も内容を見られます。そう

すると相手はその先を読んで行動しようとし  
ますから、時祷書をどう使うかの駆け  
引きが……大丈夫すか？」

すっかりメモを取るのをやめてしまっ  
て、ぐったりした表情のマコト。

マコト「つかれた」

### ○店の外（夜）

マコトと山田が出てくる。

マコト「（スマホ見て）もうこんな時間だ」

山田「なんかすいません」

マコト「いやいや、とんでもない。勉強に  
なりました」

山田「びっくりしたなあ、でも。カードゲー  
ムやるイメージ全然ないっすよね」

マコト「うん。長男がさ、ハマってるらしい  
んだわ」

山田「へえ」

マコト「何考えてるんだか分かんなくて。こ  
れで少しは理解できるかなって思ってたさ」

山田「そうなんすか」

マコト「帰るよ。じゃあね」

山田「お疲れ様です」

去って行くマコト。その背中に、

山田「明日は対戦しましょうね！」

マコト「わかった！」

○後日のカードショップ（夜）

対戦卓に山札と時祷書を置いて一人

座っているマコト。誰も近寄ってくる

気配はない。

スマホを取り出すと、マコトは山田に

チャットアプリでメッセージを送る。

〈山田くん、今日来ないの？〉

画面を見つめるマコト。

メッセージは一向に既読にならない。

男の声「いい？ デュエル」

マコト「（顔を上げ）え……あ、はい。」

どうぞどうぞ、お掛けになって下さい」

その男・岡は奇異の目でマコトを見な

がら卓につくとデッキと時祷書並べて、  
カードをシャッフルし始める。

マコト「あの、すいません、私初心者なんですけど、大丈夫ですか」

岡「なんでもいいよ」

マコト「そうですか。すいません、どうも。

じゃあ——」

マコトもシャッフルし始める。

× × ×

岡「うっし。勝ったー」

マコトが盤面を視線を落とすと、

自分の場にはアルカナが3枚、

岡の場には21枚の完敗。

岡「どうも」

岡はさっさと別の卓に向かう。

溜息を吐くマコト。カードと時祷書を  
バッグにしまい始める。

と、隣の卓にもたれて対戦を見ていた  
長髪の男・島本（36）がマコトに声  
をかける。

島本「あれ、初心者狩りってやつ」

マコト「ああ……」

島本「ああいうこととして楽しいのかなあ。

おじさんここ来るの初めてですか？」

マコト「初めてじゃないけど、まあ、そんな  
ようなものかな」

島本「なるほど。じゃ、筆下ろし、しましよ  
か」

島本はマコトの卓につくと、対戦の  
準備を始める。

マコト「筆下ろしですか」

島本「これ、使って下さい」

島本は自分のとは別に一冊の時待書を  
散りだしてマコトに渡す。

表紙には〈ジョン・ディーの時待書〉  
とある。

マコト「これ……」

島本「さっきのデュエル見ると、たぶん

アウグステイヌスよりこっちの方がおじさ  
んのプレイスタイルに合ってますよ」

島本は別卓の岡を親指で差して、

島本「あいつ、やっつけちゃいましょう」

× × ×

デッキをシャッフルする二人。

島本は6枚切りのデイルシャッフル、

マコトはヒンドウーシャッフル。

島本「それだとよく切れないですよ。僕のやりかた見て下さい。こうやって——」

× × ×

対戦中。

マコトは手札から死神のアルカナ

を場に出す。

マコト「(カードを読みながら) デス。場に出た時に他のアルカナを1枚墓地に送る」

島本の場に並んだ教皇のアルカナを

墓地に置くマコト。

マコト「(時祷書を見ながら) アルカナが

墓地に置かれて時祷書の条件を達成した

から……デッキから秘術カードを1枚公開して手札に加える……」

デッキから〈薔薇の葬列〉というカードを探し出して島本に見せ、手札に加える。

マコト「ターンエンド」

島本「（微笑みを浮かべ）いいですね」

島本はカードを引くと、

島本「でも、相手の考えていることを読まないと勝てません」

手札から愚者のアルカナを出す島本。

島本「フールはワイルドカード。指定した

アルカナとして場に出すことができる。

だから、今回はハイエロファントとして

出しましょう」

マコト「あー」

島本「まずカードを3枚引いて、それから」

秘術カードを場に出す島本。

島本「〈心霊諜報〉。相手の手札を見て

アルカナ以外のカードを1枚捨てる」

薔薇の葬列カードを墓地に置く島本。

島本「これで随分大きなアドバンテージを得ることができました」

× × ×

場に出ている使い魔カード、杯の4の〈移り気な眷属〉で攻撃するマコト。

マコト「移り気な眷属で攻撃」

島本の場には剣の2の使い魔、

〈補充志願兵〉が出ているのみ。

島本「ふーむ。おじさんの移り気な眷属は

ポテンシャルが4、一方こっちの補充志願兵はポテンシャルがたったの2。ブロックすると墓地に送られてしまうが、ブロックしなければ場に出ている任意のアルカナを1枚奪われてしまう。悩ましいな」

微笑を浮かべるマコト。

島本「こういう時は、素直に諦めましょう。

補充志願兵でブロック」

補充志願兵を墓地に置く島本。

マコト「ターンエンド」

島本「カードを引く前に」

時禱書を指差す島本。

マコト「アッ！」

島本の墓地にあるカードの枚数を数えるマコト。

マコト「1、2、3、4、5、6……7」

島本「ヘトリテミウスの時禱書」は主に墓地のカードを参照します。墓地にカードが7枚以上ある場合は、ソードの使い魔をデッキから探し出して1枚場に出してもよい」

デッキから剣の3〈子取りハゲタカ〉を場に出す島本。

島本「子取りハゲタカの特殊顕現効果はこのカードが手札以外から場に出た時、対戦相手の使役している使い魔を1枚あなたが使役してもよい」

マコトの〈移り気な眷属〉を自分の場に移す島本。

マコト「くうう」

島本「重要なのはカードパワーじゃありません

ん。まずはカードや時祷書を知ること。  
そしてアルカナの配置から相手のデッキ  
構成や狙いを読むことです。それさえでき  
ればどんなデッキでも勝つチャンスがある  
のがグレモリアなんですよ」

× × ×

岡と再戦しているマコト。  
デッキをシャッフルしながら、岡は  
マコトの時祷書に目をやる。

岡「(鼻で笑って) ジョン・ディーか」  
マコト「はい」

後ろで二人を眺めていた島本は満足げ  
な表情で去って行く。

マコト「今度は、勝ちます」

自信に満ちた笑みを浮かべるマコト。

× × ×

岡のアルカナが21枚に対してマコト  
のアルカナは2枚の完敗。

岡「勝てないと思ったら(山札に手を置く)  
こうやって、投了。負け宣言ね。これデュ

エリストのマナーだから」

カードをしまつて去って行く岡。

マコトがため息を吐いて振り返ると、そこに島本の姿はない。

スマホでチャットアプリをチェックすると、山田から返信が来ている。

「すみません急に行けなくなっちゃつて。どうすか、慣れました？」

マコトは返信する。

「やっぱり、俺みたいな年寄りにはちよつと難しかったかな」

帰り支度をするマコト。

と、別の卓で一人デッキをシャツフルしている化粧っ気のない冴えない女・御田寺（24）が目に入る。

デッキと時祷書を持ってその席に向かうマコト。

マコト「グレモリアですか」

御田寺「あ、はい」

時祷書をかざして、

マコト「よかったら」

×

×

×

杖の5の使い魔（錯乱した遊歩者）で  
攻撃する御田寺。

マコトの場には移り気な眷属が1枚。

御田寺「攻撃」

御田寺の時祷書（ブラウンの時祷書）  
にチラと目をやるマコト。

マコト「通します」

御田寺「じゃあ、えーと、攻撃が通ったから

……ラヴァースをもらいます」

マコト「どうぞ」

マコトの場に並んだアルカナ、恋人  
たちを自分の場に移す御田寺。

御田寺「アルカナが1ターンに2枚場に加

わってブラウンの時祷書の条件達成、デッ  
キから杖の使い魔を1枚手札に加える」

デッキから探し出した杖の9（さかし  
ま導師）を公開して手札に加える。

そのカードの召喚条件は恋人たちと

他数枚の特定のアルカナ。

御田寺の場にあるアルカナの配置はそのうちの1枚だけ足りない。

御田寺「どうぞ」

マコトのターン。カードを1枚引くと、マコトはアルカナ魔術師を場に出す。

マコト「魔術師の顕現効果、自分か対戦相手の場にあるアルカナ2枚の配置を交換する。あなたのラヴァースとチャリオットの配置を交換します。これでさっきのカードは召喚できませんね」

口をへの字に曲げる御田寺

微笑を浮かべるマコト。

○キングフル・バックヤード

パソコンの前に座って上機嫌に山田と話しているマコト。山田は在庫処分品に値札を付けている。

山田「それヘルメス学派の島本さんっすね」

マコト「知ってる人？」

山田「結構有名な人ですよ。あの店のランキングだといつもトップだし、エリアリーグ上位常連。大きな大会だとまだ結果は出せてないみたいですけどね」

マコト「あそう、すごい人だったんだ」

山田「ラッキーじゃないすか、直々に教えてもらって」

マコト「本当だよねえ……ね山田くんさ、今日、持ってきてる？」

山田「え？」

マコト「決まってるじゃないの（カードをシャツフルする仕草）これこれ」

○カードショップ（夜）

岡と再戦しているマコト。

今度は勝利する。

マコト「うっし」

○電車内（夜）

ぎゆうぎゆう詰め終電の中でマコト

がグレモリアの攻略本を読んでいる。  
開いているのはアルカナの配置の解説  
ページ。

マコト「(独り言) 7並べ型……ピラミッド  
型……ツリー型……」

○キングフル・バックヤード

ダンボールを逆さに置いた仮テーブル  
で対戦しているマコトと山田。

劣勢の山田。

山田「うわちよつと勘弁して下さいよお」

マコト「甘いな。アウグステイヌスの時禱書  
でピラミッド型のアルカナ配置、手の内は  
見えてんのだよ」

フロアから中国人留学生のバイト・  
ジンがやってくる。

ジン「すいませんレジ応援——」

マコト「待った！ ちょっと待ってこれ終わ  
ったら行くから！」

呆れたように二人を見るジン。

○カードショップ（夜）

デュエルスペースが満席。その中にはマコトや御田寺や岡、島本もいる。

店員「はいじゃあ今から定期リーグ始めますんで、デッキの準備ができた方からこちらの対戦番号札、えー、テーブル番号が2枚ずつ入ってますんで、こちらを1枚引いて番号のテーブルに移動してください。ジャッジが必要な時は――」

× × ×  
島本とマコトが同じ卓についている。

島本「そういえば名前がまだでしたね」

マコト「島本さん、ですよね。掛札です。」

掛札マコト」

島本「よろしくお願いします」

マコト「よろしくお願いします」

× × ×

ホワイトボードのリーグ戦結果を眺めている参加者たち。

トップは島本でマコトは4位。まんざ

らでもない表情を浮かべるマコト。

御田寺「また番外……」

マコト「まあ、気を落とさないで」

その横に貼られた年間ランクに目をやるマコト。島本はそこでもトップになっっている。

食い入るようにホワイトボードを見つめる参加者たちを尻目に、島本は結果を見ることもなく帰っていく。

× × ×

次々とグレモリアのカードパックを破っていくプレイヤー達の手。

× × ×

次々とパックを買うプレイヤー達の手。レジスターがひっきりなしに開いたり閉まったりする。

× × ×

一人で黙々パックを破っていくマコト。その卓には空パックの山ができています。

マコト「カスレア……カスレア……カスレ

……いや、使いようによっては……」

岡「(来て) あのさ、トレード、しない？」

しばし岡を見つめるマコト。

マコト「あ、ああ。どうぞどうぞ、座って」

お互いのカードを品定めする二人。

○マンション・掛札家(夜)

ミツルの部屋のドアをノックする

マコト。

マコト「ミツルー。遅くに悪いけどちよつと話したいことがあるから開けてくれないかー。ちよつとだけでいいんだー」

返事はない。

マコト「なあミツルー。ちよつとだけでいいんだー。ちよつとだけでいいから開けてくれないかー」

ドアが開いて不機嫌な表情のミツルが顔を出す。

ミツル「あのさ、お袋に何言われたか知らないけどー」

マコト「いやそういうんじゃないんだ、あのな、トリニテイ・コントロールで〈アフラ・マズダの曙光〉をフィンツシュに使うタイプがあるだろ、あれで序盤のもたつきをアルハザードの時禱書と〈砂の司祭〉のシナジーでフォローする場合に、いくつかの展開が考えられるがマジシャンを先置きして相手の展開を疎外しつつへうじ虫の天使〉に繋げるケースと、砂の司祭のミニオンを餌にハンゴドマンを置いてしまつて、そこから〈王家の伝令〉で一気にアルカナをドライブしてアフラ・マズダの曙光で畳みかけるケースだったら、リーグレベルではどっちが優勢になると思う？」

困惑して聞いているミツル。

○同・ミツルの部屋（夜）

ベッドに横になって漫画を読んでいるミツル。

スマホの攻略ブログを見ながら一人で

カードを広げて演習しているマコト。  
ミツル「(あくび) 知らないよもうやってないし。それ最近のエキスパンションのカードだろ」

マコト「でも経験があるじゃないか」

ミツル「カードプールが違えば戦略も違う」

マコト「お父さん勝ちたいんだよ」

ミツル「なんなんだよ……」

マコト「なあ、ミツル、やめたって、なんでやめちゃったの。この間あんなに熱く語ってただろ、グレモリア」

ミツル「上には上がいるし、やたら金はかかるし、無駄に時間は食う。良い事なんて一つもない」

マコト「でも楽しかったんだろ？」

間。

ミツル「無理しなくていいって。お袋に復学か就職させろってせつつかれてんだろ」

マコト「(笑) 違うよ」

ミツル「今プログラミング言語学習してるか

ら放つといて。そのうち動くから」

マコト「わかったわかった、じゃその話はもういい。はい終わり。ところで昔のカードってまだ持つてるか？」

押し入れを指差すミツル。

マコトが押し入れを開けると、そこに大量のカードや時祷書が入ったダンボールとファイルが置いてある。

マコト「おお、すっごいなあ」

ミツル「売りや一財産になるよ」

マコトはその一枚を手にとって見る。

マコト「（蠱毒皿）。あなたが場にアルカナを出すとき、そのアルカナは毒を持つ。

……これどういう意味？」

ミツル「それは古い効果だな。毒って今使わないだろ。毒を持つアルカナは自分のターンの開始時に隣接するアルカナに毒をうつす。場に出ている全てのアルカナが毒に感染するとゲームに敗北する」

マコト「マイナス効果しかないじゃないか」

ミツル「そりゃ初心者の発想でさ、たとえば  
相手がラヴァースを出そうとしてたり  
使い魔大量に並べて一気にこっちのアル  
カナを奪おうとしてる時にこれを出すと  
相手は躊躇うわけ」

マコト「ああ」

ミツル「肉を切らせて骨を断つって感じだよ  
ね。もつとも普通に使つてるとすぐ敗北に  
なっちゃうから、デツキ構築の時点でそれ  
なりに考慮する必要がある。その呪物は  
∴∴∴へロクス・ソルス〜が初出か。その  
あたりのエキスパンションは毒を取り除く  
秘術とか呪物が結構あったわけね。だから  
そういうのと組み合わせで普通は使う。  
蠱毒の召喚条件の軽さを生かした毒デツキ  
つていうのもあったよ。ま動きは単純で  
要は蠱毒を速攻で相手に押しつけちゃう  
わけね。へお節介な泥棒〜とかへポトラッ  
チ〜とか使つて。大会レベルじゃなかった  
けどな」

マコト「それ、今でも通用するんじゃない

か？　〈ドン・キホーテの時祷書〉がある

状態で蠱毒皿を場に出すとデメリット効果でこっちのアルカナが相手に行くよな？」

ミツル「ああそういうアーキタイプあるよ、

ターボドンキね。インフィニティの有力

アーキタイプの一つ」

マコト「なんだインフィニティって」

ミツル「インフィニティはほらあれだよ、

リーグ行ってるぐらいならお父さん多分

直近のエキスパンション3つのカードプー

ルでデッキ作ってると思うけど、今グレモ

リアのエキスパンションって25とかある

わけね。インフィニティはそのカード数千

種類を全部使えるフォーマット。お父さん

がやってるのはポピュラーフォーマット」

マコト、ミツルの古いカードをしげし

げと眺めながら、

マコト「インフィニティか……」

ミツル「当時は十円コモンの蠱毒皿もターボ

ドンキが発見されたら一気に千円だよ。  
ポピュラーじゃ見向きもされないような  
カードが予想外の活躍を見せるのもインフ  
イニテイの面白さだね。でもやめとけよ。  
ありや沼だから。ドロドロの底なし沼だ。  
マトモに戦えるデツキ作るだけで数十万は  
かかる。大会で実績でも残そうとしたら  
家を売らなきゃいけない（笑）

マコト「そのインフイニテイって——」

ドアのドック音。

リカコの声「ねえそこにお父さんいるの」

### ○同・居間（夜）

怒気を孕んだ呆れ顔でマコトを見つめ  
ているリカコ。

リカコ「なにやってるわけ」

マコト「うん？ なにって？」

リカコ「最近ご飯作ってないよね？ 先に

帰る方が作るって約束は？」

マコト「ちよつとその、バイト君がさ……」

リカコ「バイトのせいで」

マコト「うん」

リカコ「残業が重なった」

マコト「うん」

リカコ「だったら、そう連絡すればいいん

じゃない？」

マコト「あ、そうか、そうだよな。ごめん」

リカコ「本当は何やってるの？」

マコト「……グレモリア」

リカコ「ん？ え？」

マコト「トレーディングカードゲームだよ」

リカコ「え、なに、ゲーム？」

マコト「ほら、あの、テレビとかで最近見る

だろ。ミツルもやってる。やってるって

いうかやってたんだ。面白いんだ。これが、

もう、面白い」

間。

マコト「いいじゃないか俺が好きでやってる

分には！ いや、それでさ、借金作ったと

かじゃないんだから。それに——」

リカコ「ああ、いいよいいよ、あなたも私  
たちにあんまり興味ないみたいだしさ、  
好きにやったらいいけど、決まりは守って  
よ、ね？ 子供たちが待ってるんだから」

○キングフル・バックヤード

マコトと山田が対戦している。

マコト「どうしてそこにこだわるかなあ。

大体二人とも子供って歳じゃないんだよ。  
飯なんて作らなくても腹が減ったら自分で  
作るとか買うとかするだろうよ」

山田「なんか、大変なんすね」

マコト「大体これだってさあ？ ミツルを  
理解しようと思って始めたことなんだよ。  
いわば言われたからやってるようなもんで  
さあ」

と、扉がボタンと開いて副店長の岡野  
が入ってくる。

驚いてカードを並べたダンボールを  
ひっくり返すマコト。

マコト「ああ副店長！ お疲れさまです！」

○同・事務所

回転イスを左右にゆすりながらパイプ  
イスに座ったマコトに説教している

岡野。

岡野「感想聞かせてとは言ったけど、仕事  
中に遊んでいいとは言っていないよねえ」

マコト「すいません」

岡野「恥ずかしくないの？ 子供がやるもの  
でしょう。掛札くんいくつ？」

マコト「45歳です」

岡野「そっかあ。掛札くんが遊んでるって

教えてくれた留学生のバイト、21歳。

どう思います？」

○カードショップの外（夜）

店にはシャツターが下りている。

そこに貼られたされた定休日の案内を  
見て、マコトは溜息をつく。

島本の声「今日、休みですよ」

マコト「(振り返って) ああ、島本さん」

島本「どうしたんですか。なんか、すげえ

ガツクリしてますね」

マコト「(苦笑) いやあ」

島本「良かったら、仲間のところでちよつとやっついていきます?」

○バーへヘルメスへの外へ中(夜)

地下のバーに続く階段を下りる二人。

島本「東日本選手権が近いから調整してるんです。うちのギルド、なかなかそこが突破できなくて」

マコト「ギルドって……中世の職人組合の、あれ?」

島本「グレモリアではチームをそう呼ぶんですよ。ははは、ガキっぽいですよね」

マコト「いや、そんな」

中に入ると老若男女十数人のプレイヤ―が対戦したり、デッキ調整したり

している。

マコトを一瞥するプレイヤーもいれば、  
気にせずプレイに没頭するプレイヤー  
もいる。

カウンターに座る二人。

島本「なんか飲みます？」

マコト「ああ、酒はちよつと……じゃあ、

オレンジジュースください」

バーテン「新しい人？」

島本「面白そうだと思って」

バーテン「珍しいね」

島本「(マコトに) あ、変な意味じゃないで  
すよ。結局ギルドの連中でやってるとパタ  
ーンが決まっちゃうんです。そうすると  
仲間内では上手くなっても大会では結果が  
出ない。メタゲームにならないんですよ。  
こう言うと失礼かもしれませんが、初心  
者の方がアルカナ配置が読めなくて実践的  
なトレーニングになるんです」

マコト「ああ、なるほど」

店内を見渡すマコト。

マコト「しかし、随分と多彩な……」

島本「色んな人がいるでしょう。生きにくい世の中ですから、みんな居場所を求めているんですよ。普段の自分とは違う特別な存在になれる場所を」

マコト、オレンジジュースを一口飲み、

マコト「居場所か」

島本「僕にとってはここが家みたいなものですよ。ウチのギルド紹介しましょうか。

あの人、あのキン肉マン」

ウエイト・トレーニングをしている

男を指差す島本。

島本「あちなみにウチらお互いにアルカナで呼んでるんですけど、彼が司るアルカナはなんだと思います？」

マコト「筋肉か……ストレンクス？」

島本「ストレンクスは、伝統的には女性の姿で描かれますね。それにストレンクスの含意は力の行使ではなく忍耐なんですよ」

マコト「わかった、チャリオット」

島本「簡単だったか。じゃあ、あのおじいちゃん」

マコト「そうだな……マジシャン。いや、

隠者、ハーミット」

島本「おー、やりますね。じゃ彼」

いかにも真面目そうな姿の男を指差す

島本。

マコト「うーん、なんだろうなあ。真面目

そうだから……節制、テンパランス」

首を横に振る島本。

マコト「ハイエロフアント？」

少し笑って首を横に振る島本。

島本「ヒントは仕事」

マコト「んー？　じゃあ、ジャステイス？」

島本「正解。裁判官なんです、あの人」

ミキ（25）が島本の隣にやってくる。

ミキ「そしてこいつはマジシャン」

島本「あれ、来てたんだ」

口を封じるように島本にキスするミキ。

マコト「恋人たち……」

×

×

×

ひたすら対戦を繰り返すギルドメンバ  
ーたちとマコト。

×

×

×

デッキ構成を議論しているギルドメン  
バーたち。

フォーチュン「それだったらマジシャン2枚

追加の方が爆発力があるじゃねえか」

テンパランス「いや、ダメだ。アルカナ

バランスが悪くなる」

フォーチュン「そんなもん承知の上よ。運に

任せて押し切っちゃまえばいいんだ」

テンパランス「しかしだな、安定性を考える

と――」

ハーミット「インフィニティの現環境トップ

メタはジャングル・トリニティだ。お前

さん方はそれを突破しようとかを練って

いるようだが、トリニティの基礎的なメタ

デッキはなんだか考えてみる。そこに、

アグリツパ・スーサイドのアーキタイプが刺さるかね？」

ジャステイス「ひとまずみんなの意見を整理しよう。まずマジシャンを追加すべきが

一つ、アルカナは現状のままが一つ――」

議論に背を向けて、ノートパソコンで大会の対戦動画を観ながら分厚いノートに何か書き記している島本。

マコト「(来て) すいません、自分、そろそろ」

驚いてノートを閉じる島本。

島本「びつくりした」

マコト「あ、すいません……」

島本、ノートを見つめるマコトの視線に気付いて、

島本「門外不出の魔術書です。というのは

冗談で、大会で結果を残したデッキのアルカナ配置を書いているんですよ。アルカナ配置からデッキが読めるというのが私たちの信念です。次の一手、次の一手、その

次の一手まで読める。読めれば勝てる。  
どんなデッキであろうとね」

○その外（夜）

階段を上がって通りに出てくるマコト。

スマホを見て、あちやーという顔。

マコト「ま、いつか」

帰ろうとするとミキも店から出てくる。

ミキ「もう帰っちゃうの？」

マコト「ああ、その、終電が」

ミキ「もうそんな時間か。じゃ私も帰ろ」

マコト「じゃあ、また今度」

ミキ「じゃあね」

二人、同じ方向に歩き出す。

マコト「あ、電車？」

ミキ「うん」

マコト「はは、そりや奇遇。でもないか」

ミキ「でもないっしょ」

○地下鉄駅A・改札前（夜）

ホームを指差して、

マコト「え、こつち？」

ミキ「え？」

○マンションの前（夜）

エントランスの前でマンションを  
見上げている二人。

マコト「まさか、ここじゃないよね？」

笑い出すミキ。

ミキ「うっそお」

マコト「そんな、ウソだよお。こんなことつ  
てあるんだ。全然気付かなかった」

笑い合う二人。

ミキ「どうせだから、少し寄ってく？」

マコト「え？ よ、寄る？」

○同・801号室・ミキ家

ミキと対戦しているマコト。

盤面を睨みつけて、山札に手を置く。

マコト「もう1戦」

ミキ「えー、もう20戦ぐらいやってるじゃん」

マコト「いや、お願いします。1回ぐらい勝たないと帰るに帰れない」

ミキ「いいけどさ」

デツキをシャッフルする二人。

マコト「強いなあ」

ミキ「ふっふっふ」

マコト「何が悪いんだろう」

ミキ「そりゃカードパワーっしょ」

マコト「えー」

ミキ「うんそりゃあさ、アルカナ配置から

相手の出方を読むのも大事だよ？ だけど

結局強いカードは強い。強いカード、強い

時祷書を入れたデツキが勝つ。当たり前

じゃん。ウチのギルドじゃ異端だけどね」

マコト「メタ重視ですもんね」

ミキ「だってそれが目的だもん。メタるためにギルド作ってんだよ」

シャッフルを終えてゲームを始める

ふたり。ミキ、手札から場に魔術師を出そうとして、

ミキ「アレ」

マコト「ん？」

ミキ、忍び笑いを漏らす。

マコト「どうしたの？」

ミキ「なんでもない」

○同・掛札家・居間（朝）

出勤前のリカコが忙しなく台所仕事を、ヒカルがスマホを見ながらダラダラと朝食を取っているところにくたくたのマコトが帰ってくる。

マコト「ただいまー」

リカコとヒカル、平静を崩さずに、マコトをろくに見ることなく、

リカコ「どこ行ってたの」

マコト「ちよっと、大会前の調整でな」

リカコ「それどういう意味」

冷蔵庫から炭酸水を取り出してガブ

飲みするマコト。

マコト「あー」

あくびをしながら寝室に入っていく。

リカコ「今日出勤じゃないの」

マコト「風邪ひいたから休む」

リカコは辛抱しかねてマコトに叫ぶ。

リカコ「あんた何考えてんのよ！」

○イベント会場・メインホール

グレモリアの東日本選手権。百人ほどのプレイヤーが対戦しているのをチャリオット、ハーミット、島本、マコトが眺めている。

島本「大丈夫だったんですか、仕事の方は」

マコト「有給取っちゃいました」

島本「エントリーもしてないのに」

マコト「勉強になるかと思いましたが……懐かしいなあ、昔ね、私もよくこんなところで

囲碁のアマ大会に出てましたよ」

島本「プロ目指してたんですか？」

マコト「いやあ、まあ、そのうち私には無理だと悟りました。上には上がいますから」  
島本「でももう、グレモリアでは立派なデュエリストですよ」

### ○同・出場者控え室

島本らがカードを広げて作戦会議を開いている。

輪に加われず手持ち無沙汰のマコト。  
そこに、山伏の格好をした三人の男がやってくる。リーダーの名は烏天狗。

烏天狗「ほーう！こんなところに居たとはなあ、ヘルメス学派！」

島本「やあ、どうも。また修行ですか」

烏天狗「手前らごとき、破ったところで何の修行にもなりはせんわい」

島本「そういうことは勝ってから言った方がいいんじゃないですか？」

烏天狗「なにい！」

チャリオットが烏天狗をジッと見つめ

ながら立ち上がる。

ハーミット「なんのためにここに来とる。」

勝負は盤面につけるこった」

烏天狗「ふん」

去って行く山伏たち。

マコト「何者なんです？」

島本「オヅノ衆。曼荼羅型のアルカナ配置が特徴的な中堅ギルドですよ。彼らのアルカナ配置なら頭に入ってる。どう出ようが負けやしませんよ」

○同・メインホール

島本と烏天狗が対戦しているのを

マコトが遠巻きに眺めている。

烏天狗、曼荼羅状にアルカナの配置

された場にアルカナ吊された男を出す。

島本「僕、未来が読めるんです」

烏天狗「ふん、何をいっちよる。攻撃」

手札から秘術カード〈停戦調停〉を出す島本。

烏天狗 「けっ。ケチくさい手え使いやがって」

島本 「そのアルカナ配置でハンドマンを出すのなら、次はタワーじゃないですか？」

烏天狗の手が止まる。

島本 「タワーの次はホイール・オブ・フォーチュンだ。その3枚の手札にはタワーとホイール・オブ・フォーチュンがある。そして、あなたは〈想像的一言主〉を召喚する。違いますか？」

烏天狗 「ターンエンド」

山札からカードを引いて、島本は

手札から呪物カード〈沈黙の帳〉を場に出す。

島本 「それなら先に対策しておこう。これだ。〈想像的一言主〉はもう役立たずです」

ギャラリーがどよめく。

烏天狗 「……まさかこんなチンケなカードが役立つとは思わなんだ」

秘術カード（乱反射）を場に出す烏天狗。ギャラリィは更にどよめく。

× × ×

トロフィーを持った烏天狗をスタッフがスマホで写真に撮っている。

スタッフ「はい大丈夫です。ありがとうございます  
いました」

会場からスタッフや参加者の拍手。

○同・控え室

帰り支度をしている島本たち。

ハーミット「ま、次に期待だな」

島本「あそこで沈黙の帳とはねえ」

烏天狗「（来て）おい、島本」

振り返る島本たち。

烏天狗「お前の読みな、当たりだ。沈黙の帳を除けばよ。お前そこまで読めていて、  
どうして沈黙の帳は読めなかった」

荷物を持って部屋を出て行く島本。

島本「勝った方が言う台詞じゃないなあ」

島本「日本グランプリ、頑張ってください」  
チャリオットやマコトも後に続く。  
去り際、マコトは烏天狗の眼差しに  
不可解の色を見て取る。

○カードショップ（夜）

ファイリングされた単品売りのカード  
を見ているマコトとミキ。

マコト「島本さんでも読めないものがあるん  
だなって、ちよつと驚いたよ」

ミキ「インフィニティの大会でしょ。使える  
カードと時祷書は合せて3000種以上  
だよ？ 何が出てくるかなんてあいつにも  
読めないって」

マコト「厳しい世界だねえ」

目当てのカードを見つけて、スマホで  
実勢価格を調べるマコト。

マコト「600円かあ。メインデッキから  
投入ならともかくサイドボード用のメタ  
カードで600円？ レアでもないのに」

ミキ「強くなりたいでしょー？」

マコト「強くなりたいてさ……」

○住宅街（夜）

マコトとミキが話ながらマンションに向かっていると、マンションから浦沢が出てくる。

ギクつとして立ち止まるマコト。浦沢、マコトに気付いて視線が合う。

マコト「浦沢くん？」

慌てて逃げていく浦沢。

マコト「浦沢くん！」

ミキ「誰？ 知ってる人？」

マコト「あ、いや……ごめん今日は、もう帰るよ」

ミキ「えー、ちょっとだけやってこうよ」

マコト「ごめん」

マコトは急いでマンションに入る。

○マンション・掛札家・玄関く居間（夜）

マコトが慌てて帰ってくる。

居間は照明が落ちている。

マコト「ミツルー？ ヒカルー？ いるか

ー？ ちよつと確認したいことがあるんだ  
けどさー」

居間に入ったマコトが照明を点けると  
壁際に山積みになったダンボール箱が  
目に入る。怪訝な表情のマコト。

× × ×

ヒカルの部屋のドアを叩くマコト。

マコト「ヒカルー。いるかー」

反応なし。

× × ×

ミツルの部屋のドアを叩くマコト。

マコト「ミツルー。ミツルはいるだろー。

なあちよつと開けてくれないかー」

反応なし。

マコト「開けないなら入るぞー」

躊躇したのち、恐る恐るドアを開ける  
マコト。

中には誰も居ない。

と、玄関から鍵の閉まる音。

それから開ける音。

リカコの声「あれ、出る時カギ締めた

よね？」

マコトが玄関に向かうと、リカコと

ミツルとヒカルが入ってくるころ。

リカコ「なにもう帰ってたの？ また朝帰り

だと思つてご飯作つてないよ」

マコト「ああ、いや……それより、何か変な

こととかないか？」

リカコ「なあに、変なことつて」

ヒカルが不機嫌に部屋に戻っていく。

ヒカル「バツカじゃねえの。なにがボロ儲け

だよ」

リカコ「ヒカル。ねえあんたなんでいつも

そうなの」

ヒカル、リカコに中指を立ててドアを

閉める。

ミツルも無言で部屋に戻っていく。

溜息を吐いて玄関に座り込むリカコ。

マコト「いや、無事ならいいんだけどさ、さつきほら、前に話したレジの金盗んでクビにしたバイトがそこから出てくるの見たんだよ。だから逆恨みでなんかされたんじゃないかと思って……」

リカコ「どこ行ってきたか聞かないの？」

マコト「え、いや安全確認が先だろうと思っ  
て……」

リカコは立ち上がって居間に入って行く。追うマコト。

マコト「ちよと待ってくれよ、何が不満なんだ。言わなきゃわからないじゃないか。なあ」

壁際のダンボールの山がマコトの視界に入る。

マコト「あのダンボール、あれどうした？」

リカコ「商売道具。副業始めるの」

マコト「副業？」

リカコ「うんそう。健康食品とか」

冷蔵庫から商材の水ペットボトルを一本出してマコトに投げ渡すリカコ。落としそうになりながらペットボトルを受け取るマコト。しげしげとそのラベルを見つめる。そこにはニュートリノ再結合水と書いてある。

マコト「なんだこれ？」

リカコ「ニュートリノってね、なんでも通過するの。その時に体内で吸収しやすいように分子構造が変化する水があるんだって」  
同じペットボトルの水を飲むリカコ。

マコト「飲めば？」

頭を抱えるマコト。

リカコ「なに？」

マコト「こんなゴミにいくら使った」  
ムっとするリカコ。黙って寝室に入っていく。

ややあって、何かを手に戻ってくる。  
グレモリアのカードを1枚1枚マコト

に投げながら、

リカコ「じゃこれは？　これは？　これは  
どうなの？　ゴミじゃないの？」

マコト「おいやめろよ！」

慌てて床に散らばったカードを拾い

上げていくマコト。

マコト「スリーブに入れてないカードには  
素手で触らないでくれ！」

なおもカードを床に放り続けるリカコ。  
マコト「やめてくれって！」

抱きしめるようにリカコの両手を押さ  
えつけるマコト。

リカコ「わかったから離してよ！」

ゆっくりとリカコから手を離すマコト。

リカコは叩きつけるようにマコトに  
カードを渡す。

リカコ「あんたの子だね。さつきミツルと  
ヒカルも販売ミーティングに連れてった  
けど全然わがろうとしない。あなたたち  
のためにやってるのに」

マコト「子供を巻き込んで……分かるわけ  
ないだろう。目を覚ましてくれよ。騙され  
てるんだよお前」

リカコ「あんなだあってそうじゃない？」

マコト「だから違うんだって。これはゲーム  
なんだ。遊びなんだよ」

リカコ「でしようね」

リカコ、嘲笑を浮かべながら寝室に  
入っていく。

一人居間に立ち尽くすマコト。

やがて、床のカードを拾い始める。

○カードショップ（夜）

リーグ戦の戦績表を眺めているマコト  
らプレイヤーたち。

マコトは14位。トップは島本。

御田寺「また番外かあ……」

マコト「もうやめた方がいいんじゃないです  
か？ 勝てないですよ」

ポカンとしてマコトを見る御田寺。

マコトは不機嫌に販売コーナーに入っ  
ていく。

レアカードのファイルを開いて眺める  
と、どれも最低数千円、物によつて  
は1枚で1万円を超える高額カード  
ばかり。

しばらくそのカードを見つめるマコト。  
それから、片っ端から高額カードを  
引き抜いてレジに持っていく。

マコト「これ4枚ずつありますか？」

## ○A T M

通帳を見ているマコト。ため息。

## ○キングフル・装飾品フロア

レジに立ってショーケースに入った  
高額アクセサリーを眺めているマコト。

## ○マンション・掛札家・居間（夜）

ソファアを寢床にしているマコト。

少しも減っていないダンボールを  
眺めている。

○消費者金融の無人審査機

自動音声に従って新規契約をしている  
マコト。

自動音声「スキヤナーに源泉徴収票、もしくは  
三ヶ月分の給与明細を置いて、OKボタ  
ンを押してください」

○その外（夜）

封筒に入った万札を数えながら出てく  
るマコト。百万ほどある。

○カードショップ（夜）

対戦中のマコト。その表情は険しい。

対戦相手「どうします？ ムーン出したら  
こっちの勝ちですけど」

× × ×

レジャー

シングルカードのファイルレジに  
置くマコト。

マコト「これ、ファイルごと下さい」

○マンション・ミキの家（夜）

一人でデツキをシャツフルしている  
マコト。

マコト「なんで勝てないんだ。いくら使った  
と思ってる……」

マコトから離れてタバコを吸っていた  
ミキが、マコトに背を向けたまま、  
ミキ「おじさんさあ、悪いけどもう来ないで  
くれない？」

マコト「どうしてさ」  
ミキ「だっておじさんとやっても面白くない  
んだもん。弱えし」

○同・掛札家・居間（夜）

ソファアーに横になっているマコト。  
そこから見える商材のダンボールは

前よりも増えている。

○同・寝室（夜）

音を立てないように入ってくるマコト。ベッドではリカコがこちらに背を向けて寝ている。

静かにキャビネットの引き出しを開けるマコト。リカコの通帳と印鑑がある。しばらくそれを眺めるマコト。

やがて、何もせずに静かに部屋を出る。その間ずっと、リカコは寝ているふりをしながら目を開いている。

○同・ミツルの部屋（夜）

ノートパソコンに何か打ち込んでいるミツル。

マコトの声「ミツルー、夜分遅くに悪いけど開けてくれないかー。ちよつと話したいことがあるんだー」

うんざりした表情を浮かべるミツル。

マコトの声「ミツルー」

ミツル「鍵かかけてねえから入れよ」

マコトが入ってくる。

マコト「勉強してるのか。偉いな」

ミツル「なに、何の用？」

マコト「あのな、お父さんな、インフィニ

テイやることにしたんだ。ポピュラーフオ

ーマツトはどうもお父さんに向いてないみ

たいなんだよ」

ミツル「ポピュラーで結果出せないやつが

遙かに高度なスキルとデツキの要求される

インフィニテイで勝てるわけねえだろ。

早く寝ろ」

マコト「うん、だからお前のカードくれ」

ミツル、啞然としてマコトを見る。

ミツル「正気じゃねえな……」

○カードショップ（夜）

マコトがレジに来ている。

マコト「へッゴールデン・ドーン」ヘルネツサ

ンス〜それから……インフィニティで使えるエキスパンションのカード全部見せて下さい」

店員「全部ね」

カウンター後ろの棚に古いエキスパンションのファイルを探す店員。

分厚いファイルを二つマコトに渡して、店員「とりあえずこれ、ゴールドデン・ドーンとルネッサンス」

デュエルスペースに持って行って卓につくと、マコトはファイルを開く。

中のカードはどれも数万円から十数万円の値札が貼られている。  
マコト、固まる。

○地下鉄駅B・改札外（夜）

がつくりと肩を落としたマコトが改札から出てくる。

とぼとぼと歩いていると、壁際でキスしている女二人がいるのが目に入る。

ミキとヒカルだ。

楽しげなミキと貪るように唇を求め  
るヒカルを、マコトが呆然と立ち尽く  
して眺めていると、ヒカルがその視線  
に気付く。

しばしマコトを眺めていたヒカルは  
やがて視線をミキに戻して、彼女に足  
を絡ませる。

通行人がチラチラと好奇の目で二人を  
眺める中、マコトは何も見なかったか  
のように二人の横を通り過ぎて、その  
場を後にする。

○マンション・掛札家（夜）

マコトが帰ってくる。

マコト「ただいま」

暗い室内。居間の電気を点けるマコト。  
すると居間を占拠していた商材のダン  
ボールがすっかり消えていることに  
気付く。

部屋を見渡すと消えているのはダンボールだけではない。大型の家具や家電以外の様々な物が無くなっている。

× × ×

寝室――

マコトがキャビネットを開けると、そこに通帳と印鑑はない。

× × ×

マコトが駆けつけるとヒカルが自分の部屋に戻ろうとするところ。

マコト「ヒカル……」

ヒカル「なんか言う？ 言えば？ ほい」

言い淀むマコト。

ヒカルは自室に入って行く。

ヒカル「そういうえばお母さん出たよ。

ミツルも一緒。こっちも荷物まとめたら

知り合いのどこ行くから。バイバイ」

マコト「え？」

ヒカル、ドアを閉める。

それから少しだけ開いて、

ヒカル「同棲する」

再びドアを閉める。茫然自失のマコト。

マコト「……ミツル」

× × ×

ミツルの部屋――

押し入れを開けるマコト。

カードの山は綺麗に無くなっている。

マコトは静かに泣き出す。

○キングフル・バックヤード

パソコンで特価品POPを作っている

山田と、イスに座って上の空のマコト。

マコト「インフィニティだとのアーキタイ

プが強いのかなあ。インフィニティだと何

でも使えるもんなあ。そうかパラケルスス

デッキ組めるもんねえ。でもいくらかかる

んだらうねえ。いくらあっても足りない

よなあ」

山田「主任、なんか、大丈夫すか？」

マコト「ダイジョーヴ」

山田「あの、キツカケ作った自分が言うのも  
なんですけど、ちよつとグレモリア休んだ  
方がよくないすか」

マコト「休んだら今よりもっと置いてかれ  
ちやうよ」

山田「でも、そんなちよつとで追いつける  
世界じゃないですし……」

マコト「仕事してる感、出してくるかあ」  
フロアに出て行くマコト。

愛想笑いを浮かべる山田。

#### ○同・装飾品フロア

ジンが立っているレジにマコトが  
入ってくる。

ジン「いらっしやいませー」

マコト「いらっしやいませのませー」

閉鎖中のレジを開けてレジ誤差確認を  
始めようとするマコト。

と、レジ内の現金を見てマコトの手が  
止まる。

横目でジンを見るマコト。接客中。

それを確認するとマコトはジャーナルを印刷して、出てきた売り上げ明細をチェックし始める。

ジン「ありがとうございますー」

マコト「ジンさん、ちよっと」

ジン「はい」

マコトはジンに明細を見せながら、

マコト「ごめんこれなんだけどさ、明細だと部門06になってるけど、確か08だった

よね？」

ジン「あー」

マコト「参ったなあ。たぶんJAN登録時のミスだ。いや、ジンさん悪くないんだけどさ、これだと棚卸しの時に在庫狂っちゃって全部修正しないといけなくなっちゃうんだ。ちよっと申し訳ないけど、打ち直してもらえますか？」

ジン「あ、はい」

マコト「部門再登録って教わってたっけ？」

ジン「あー」

マコト「あ、いいやいいや。じゃあさ、後で再登録するから、この部門06になってるやつ？ 手が空いた時でいいから一旦返品扱いで売り上げ取り消しにしてくれる？ 終わったら私に言ってもらえれば再登録しますんで」

ジン「あ、はい」

マコト「ごめん、悪いけどよろしく」

そそくさとレジを出て行くマコト。

マコト「あ、レジ誤差がすごい金額になっちやうと思うけど、後で自分が再登録して直すから気にしないでね。終わったら私に言っして下さい。私が直接やるんで」

去って行くマコトを眺めるジン。

○同・トイレ

個室の中で便座に座って頭を抱えて  
いるマコト。

マコト「大丈夫大丈夫大丈夫、問題ない」

何度か深呼吸をする。

マコト「よし」

水を流して個室を出ると、洗面台で手を洗う。

鏡に映った自分の顔を見つめるマコト。

○同・装飾品フロア

レジに向かうマコト。

と、レジで山田とジンが売り上げ明細を手に何か話しているのが目に入る。その場に立ち尽くすマコト。手が震えます。

マコトに気付いた山田が売り上げ明細を持って近づいて来る。

山田「あ、主任、これなんですけど――」

マコト「ごめん！ なんでもない！ 帰る！

お腹いたい！ お疲れさま！」

走って逃げていくマコト。

呆然とその背中を眺める山田。

マコト「さようなら！」

○カードショップ

やつれたマコトが店に入ってくる。

ゾンビのようにデュエルスペースに

歩いて行くと、空いた卓に座って、

バッグから取り出したデッキと時表書を

を卓に置く。

光のない目でそれを眺めるマコト。

スマホを出して通話履歴を開く。そこ

にはマコトからリカコにかけて電話の

不在通知が並ぶ。

リカコに電話をかけるマコト。呼び

出し音が延々続く。

別の卓で仲間と談笑していた岡が

マコトに気付く。話を切り上げて彼の

卓にやってくる、イスに座って話し

出す。

岡「昼間に来んの珍しいっすね」

マコト「やる？」

岡「やんないっすよ。お兄さんとやっても

面白くなさそうだもん」

マコト「別の人にも言われたよ」

岡「大体、お兄さんだって面白くないでしょ。  
勝てなくて」

マコト「面白くない」

岡「結局さ、カード資産とデュエル経験のある奴が勝つんだよね。インフィニティなんか特にそうでしょ。どいつもこいつも勘違いしてるんだよ。追いつけ追い越せ、でもスタート位置が違うから勝てない奴は永久に勝てない名ばかりの競争社会からこっちの世界に逃げてくるけど、カードゲームの方がよっぽど残酷な競争社会なんだよ。セーフティネットなんかありやしない。落ちたら底まで落ちるだけだ」

マコト「同感だ」

岡「落ちたって顔してんね。なあお兄さん、よかったら俺とトレードしないか。失うものなんてもうないだろう。いくつかのカードぐらいしか」

呼び出し音はまだ鳴っている。

○バーへヘルメス（夜）

ノートパソコンで株価チャートのよう  
な画面を流しながら、カウンターに

アルカナを並べて何か考えている島本。  
店内はギルドのメンバーで溢れている。

マコトの声「何が欲しいの。あんたが欲しいが  
るようなカード持ってるかな」

岡の声「カードなんかじゃない」

マコトの声「時祷書か？」

岡の声「（笑）近くはなかったね。魔術書だよ、

魔術書。ヘルメスの魔術書」

マコトの声「魔術書……？」

岡の声「お兄さん見たことないかな、島本が  
なんかノートに書いてるの」

マコトの声「ああ……」

岡の声「あれを欲しがってるやつがいる。

正確には欲しがってるギルドだな。あれ  
さえありや世界大会も夢じゃないって信じ  
てるんだよ」

マコトの声「そりや魔術書だね。確かに」

マコトの声「で見返りは。それで俺に何の得がある」

岡の声「百万」

マコトの声「そんなはした金」

岡の声「(笑) トレード不成立？」

間

マコトの声「魔術書か。あんだ、信じてるの」

岡の声「信じてたら自分で使うよ」

来店を告げるベルの音。

マコトが来店、島本の隣に座る。

島本「掛札さん。なんだか久しぶりです

ねえ」

マコトは曖昧に会釈して、

マコト「すいませんハイボール」

島本「飲めないんじゃないやなかったでしたっけ」

マコト「今日ぐらいは」

バーテンが出したハイボールを飲む

マコト。むせる。

島本「大丈夫ですか？」

マコト「だ、大丈夫。どうも」

島本のバッグをチラと見るマコト。

マコト「よかったら、島本さんもどうです」

島本「自分もあまり強くなって」

マコト「飲んで下さい。会社、辞めてきたんです」

島本「へー」

マコト「今の会社じゃあ、グレモリアに集中できない」

島本「(笑) 大丈夫ですか？」

マコト「いや、ご心配なく。新しい職場の待遇は今よりも良い。だから、祝って下さい」

島本に微笑みかけるマコト。

島本「(バーテンに) 同じものを」

マコト「このあいだの大会、残念でしたね」

島本「どうにも詰めが甘くて」

マコト「でも惜しかった」

島本「初心者向けのこんな格言がありますよ。

たとえ相手の場に並んだアルカナが0枚

でも20枚でも関係ない」

島本・マコト「自分の場にアルカナが21枚  
並んでいればあなたの勝ち」

島本「21枚先に並べられなかったら負け  
なんです。勝つか負けるかの二つに一つ。  
勝てなかったら相手の手札が読めていても  
何の意味もありません」

バーテンが出したハイボールを島本は  
一気に飲み干す。

空いたグラスをバーテンに差し出すと、  
困ったような表情を浮かべながらバー  
テンはグラスを取る。

島本「でも次は世界に行く。世界つてアル

カナのほうじゃないですよ。世界大会」

うつすら微笑む島本。

マコト「自信がありそうじゃないですか」

島本「負けは負け、でもこの前の大会で確信  
したんです。僕はもうどんなデッキを相手  
にしてもアルカナ配置で行動が読める。

これさえあれば負けはしない」

島本「長年の研究の賜物です」

ノートの入ったバッグをパンパンと叩く島本。

ハイボールの二杯目を受け取って、再び一気に飲み干す。

島本「見たいですか？」

マコト「え？」

島本「(笑)冗談ですよ。見せたら僕があなたに負けてしまう」

間。

マコト「一度ぐらいあなたに勝ってみたい」

島本「ズルしてでも？」

マコト「アルカナ研究はズルなんですか？」

島本「いや……」

マコト「ミキさん言ってた。結局はカードパワーが全てだって。持たざる者は負け、持つ者は勝ち」

島本「そんなことはありません。グレモリアは平等な世界だ」

マコト「なら持たざる私も、あなたのアルカ

ナ配置が解読できれば勝てる」

島本「そうですよ。そう言ってます」

マコト「見せてくれませんか？」

間。

大笑いする島本。

ギルドメンバー達が好奇の視線を注ぐ。

島本「全然意味がわからない。でもいいですよ。見たければどうぞ」

バッグからノートを取り出してマコトに渡す島本。

島本「面白い人だな」

席を立って店の奥に向かう島本。

マコト「どこへ」

島本「トイレです。酒はやっぱりダメだ」

島本は笑いながらトイレに消える。

マコト、手にしたノートを恐る恐る

開く。そこには様々なアルカナ配置と、

そこから読み取れるデツキタイプや

カードの動きが書かれている。

マコトの鼓動が高鳴る。

トイレに目をやるマコト。まだ島本は出てこない。

バーテンに視線を移すと、マコトに背を向けて作業をしている。

ギルドメンバーたちを横目で見ると、みな対戦に没頭している。

再びトイレに目をやるマコト。島本はまだ出てこない。

マコトはノートをジャケットの内側に隠すと、静かに出口へと向かう。

あと、五歩、四歩、三歩……。

マコトがドアを開けようと手を伸したところで、ドアは外から開いて、チャリオットがマコトの前に立ちはだかる。腕を組んでマコトを睨みつけるチャリオット。

マコトが振り返ると、島本とギルドメンバーの全員がマコトを見ている。

島本「そんなことだろうと思った」

マコト「……チャンスをくれ」

島本「何のチャンス？」

マコト「取り戻すチャンス」

島本「ふうん」

マコト「あなたもう負けないでしよう。

勝負してくれ。もし俺が勝ったら魔術書を譲ってほしい。本当は頼まれたんだ。他のギルドにあなたの魔術書を売ろうとしてるヤツがいる。でももうそんなじゃない。これがあれば失ったものを全部取り戻せる気がするんだ」

島本「無茶苦茶だなあ。けどいいですよ。

どうせ僕が勝ちますから。しかし、こっちだけ戦利品を差し出すのはフェアじゃない。

あなたが負けたら僕は何を貰えるんです」

マコト「家。家を渡す」

頭を掻く島本。

島本「いやそういうのは……口約束だったらなんだって言えますし」

マコト「あなたたちの中に裁判官がいるでしょう。ジャステイスが。法的に有効か

聞いてみればいい」

島本「うーん」

ジャステイスを見る島本。

× × ×

ギルドメンバーとバーテンが見守る中、マコトと島本が対戦を始めようとしている。

島本「まだ引き返せませすよ」

マコト「その気はありません」

島本「あなたは僕に勝てないし、デュエルで手は抜けない」

マコト「ええ。こっちもそのつもりはありません」

島本「そうですか」

マコト「始めましょう」

束の間、マコトは対戦に興味を示さず隅の方で一人タバコを吸っているミキを見つめる。

二人、同時に山札からカードを引く。

○マンション・掛札家だった部屋（夜）

がらんどうになった居間に島本が立っている。そこからスカイツリーを眺める島本の背後には、ヘルメスに居たギルドメンバーのほか、岡や浦沢、酒井に山田も来ており、一様にスカイツリーを眺めている。

○木造アパート・マコトの部屋（夜）

殺風景な部屋にマコトが立ち尽くして、島本と同じようにスカイツリーを眺めている。その背後には誰もいない。

○マンション・掛札家だった部屋（夜）

恍惚とした表情の岡が島本に、

岡「いよいよですね」

島本「ええ。ご苦労様でした。デビル」

破顔する岡。

島本「（酒井を見て）ハイプリエス」

頷く酒井。

島本「(山田を見て)ハイエロファント」

頭を下げる山田。

島本「(浦沢を見て)ハングドマン。それからみんな、ご苦労様でした」

島本は部屋の外に向かう。

道を空けるギルドメンバーたち。

○カードショップ(夜)

一人で卓にアルカナを並べている

島本。

御田寺「(来て)あ、島本さんだ」

島本「ああ、どうも。こんばんは」

御田寺「一人なんですか？ 今日にはギルドの人と一緒にやらないんですね」

島本「たまには一人になりたくて」

御田寺「あのう……それなら、もしよかったら、少しだけ対戦してくれませんか？」

島本「いいですよ。どうぞ」

御田寺「やった」

座ってデッキの準備を始める御田寺。

島本「結構通ってますよね」

御田寺「はい、あの、一年ぐらい」

島本「誰かの紹介ですか？ 女性プレイヤーって男性に比べたら少ないから」

御田寺「前に付き合ってた人がやってて、

それで私もハマっちゃって、その人はもうグレモリアやめちゃったんですけど」

島本「ははは、ありますよ、そういうパターン。えっと、なにさんでしたっけ」

御田寺「御田寺です。リーグ戦番外常連の」

島本「そう卑下しなくたって」

対戦の準備が完了。

島本「じゃ、先攻どうぞ。あ、三本マッチ

二本先取、ポピュラーフォーマットでいい？」

二人、話しながら対戦をする。

御田寺「あ、はい。じゃあ、マジシヤンを出します。マジシヤンを出して……呪物の〈偽ヘルメスの遺言〉を出します。ターンエンド」

島本「マジシャンで偽ヘルメスか」

吊された男のアルカナを出す島本。

島本「どうぞ」

山札からカードを引く御田寺。

御田寺「うっ」

悩ましげに戦車のアルカナを場に出す

御田寺。

御田寺「エンドです……」

島本「なんか事故ってそう」

苦笑する御田寺。

島本、カードを引いてそのまま、

島本「どうぞ」

御田寺「アルカナは出さないんですか？

手加減なんてしないでも——」

島本「いえいえ、本気ですよ。読んでるん

です。次にあなたが出すアルカナで僕は

あなたのデッキが読める。それを待つ

てる」

御田寺「えー」

御田寺、女教皇のアルカナを場に出す。

御田寺「じゃ、出して、それからへ水夫の

亡霊」です。どうしますか？」

島本「なるほどね。オツケー。次にあなたは  
ハンドマンをトライアングル配置で出す。  
顕現効果で水夫の亡霊を墓場に置いて  
偽ヘルメスの遺言で山札に戻す。空いた  
場にはへイタズラ好きのランダ」を出して  
おいて時間を稼ぎながら次のターンには  
アルカナ以外の同じカードを二回引くこと  
になるからへユイスマンスの時祷書」の  
条件達成。そのコンボでアドを稼いで  
勝ちを狙う。どうです？」

困ったような笑ったような顔の御田寺。  
手札から秘術カードを出す島本。

島本「だからへ十字軍の爪痕」で偽ヘルメス  
文書を墓場に置きます」

御田寺「……負けました」

山札に手を置く御田寺。

島本「(笑) 早くない？ もっと粘ればいい  
のに」

御田寺「いや、もう、無理です。次に期待します」

島本「思い切りがいいんだかなんだか」

カードを回収してシャッフルする

二人。

御田寺「あ、そういえば、島本さんどうして掛札さんをギルドの集まりに呼んだんですか？ ギルドじゃないのに」

島本「なんで知ってるの？」

御田寺「この前のリーグの時に聞いて、いいなって思ってた……」

島本「純粹に対戦したかっただけですよ。

なんだ、御田寺さんも言ってくればよかったのに。いつでも歓迎しますよ」

御田寺「え、大丈夫なんですか？ ほら、ギルドがどんなデッキを使うかとか知れちゃったら、大会で不利じゃないですか」

島本「秘密結社じゃないんだから」

御田寺「違うんですか？」

島本「違いますよ。ギルドは一緒に戦うため

の仲間です。いや、家かな」

第二戦の準備が整って、二人は対戦を始める。

御田寺「秘密結社といえば、フリーメイソンも元々は中世の職人ギルドだったとか」

島本「へえ、そうなんですか」

御田寺「でもそれを裏付ける明確な証拠は無いそうなんです」

島本「よくわからない話ですね」

御田寺「島本さんは、魔術って信じますか？」

島本「あの、何が言いたいんですか？」

御田寺「マジシャンっていうから……」

島本「(笑) マジシャンね。なるほど。御田

寺さん、タロットには色んな種類があるってご存知ですか。大きく分けてヴェイスクンティ版、マルセイユ版、ウエイト版、そこから様々なバリエーションが生まれました。今私たちがプレイしているグレモリアはこのうちのマルセイユ版に準拠したものです。最初のタロットと言えるヴェイスクン

テイ版は絵札に隠された意味を読み取る  
ことが目的のいわば宮廷遊戯、それを庶民  
に開放したのがマルセイユ版です。

タロットの絵柄には様々な象徴が込められ  
ていますが、ちなみに御田寺さん、マルセ  
イユ版に描かれた魔術師が何者か、わかり  
ます？」

御田寺「うーん」

島本「手品師ですよ、一種のね。魔術師は  
テーブルの上で魔術道具を操っている。

彼はその魔術的技芸で人々を魅了するん  
です。魔法なんか使えやしません。でも  
人を魅了するその技は確かに魔法と言える  
のかもしれないね」

御田寺「魔術師の顔と身体の向きはマルセイ  
ユ版では一致しない。これは行為と思考が  
別々であることを示している。なるほど、  
島本さんにぴったりかもですね」

島本の表情が硬くなる。

御田寺「フリーメーソンの起源に明確な証拠

がないように私の考えていることにも明確な証拠はありません。でも確かなのは島本さんはグレモリアのプレイヤーであると同時にグレモリアを扱うオンラインカードショップのオーナーだったということです。そのショップは今は別の人間が経営しています」

御田寺「そして私の調べた限りではその人物はテンパランスさんの知り合いです。仲良く二人一緒に写った写真がフェイスブックに上がってました」

盤面は御田寺が優勢。島本は思うように良いカードが引けない。

御田寺「ずっと不思議に思ってたんですよ。なんで島本さんのギルドは大きな大会で結果を残せないんだらうって。でもそれで解決しました。負けるために大会に出ていたんです。極端なまでにメタゲームを重視する島本さんとギルドが大会に持ち込むデッキはいつも独創的で歪です。

その動きを読むのは容易ではありません。でも事前にデッキ構成が知られていたら違います。特定のアーキタイプを仮想敵としたメタデッキであるが故にたった1枚の対策カードで動きを封じられてしまうこともある。この前の烏天狗さんのように。

× × ×

フラッシュューー

烏天狗と島本の大会での対戦

× × ×

御田寺「それがたとえば、時価10円の誰も見向きもしないようなカードとしたらどうですか？もし私とそのカードを大量に持っていて、タイトル獲得に最も近いと言われる有力ギルドの使用するデッキにそのカードが有効だと知っていたとしたら。インフィニティのフォーマットでは何年も前に販売終了になったカードもデッキに組み込みます。流通数の限られたカードはどこかのカードショップが独占してしま

えび入手することは難しくなります」

間。

島本「言いたいことはわかったけど、それ

は？ 攻撃しますか？」

御田寺「あ、はい」

手札を見る島本。山札に手を置く。

御田寺に大アルカナが一枚もない手札を見せて、

島本「アルカナが一枚もないんじゃないや話にならない」

二人はカードを集めてシャッフルし始める。

島本「面白い話だけど、でもそれだけかな。

面白いだけの妄想と現実は違うよ」

御田寺「面白いですよ。仮に本当だとしたら回りくどい方法だなあって思います」

島本「本当だよ。そこまで環境を読めてるんだったら普通に勝てばいい。世界大会だって狙えるよ」

御田寺「そうですねえ、怖かったのかもしれないですねえ。もし島本さんや何人かのメンバーだけが先へ先へと進んで行ってしまったら、他のメンバーは不満を感じて別のギルドに行ってしまうかも。ギルドが家代わりならその家は守りたい。だから勝つことよりもギルドを維持することが優先事項になったのかも」

島本「秘密結社がそうであるように」

御田寺「秘密結社というより、カルトじゃないでしょうか」

シャツフルが終わって、二人は第三戦を始める。

御田寺「ところで島本さんはなんでマジシャンって呼ばれてるんですか？」

島本「盤面の魔術師だからですよ。今度はイカサマ説でも出しますか？」

御田寺「いえ全然。そんなつもりは」

島本「当たり前ですよ、イカサマなんてしてないんだから。さっきの妄想仮説も」

御田寺「イカサマなんて一言も言っていないです。私はあなたを本当の魔術師だと思ってるんです」

島本「また変な方向に入ってきたねえ」

御田寺「タロットは解釈のゲームですから。」

私も勉強したんですよー。オカルティズムのより広範な形をエゾテリスムと呼びます。

その研究家アントワーヌ・フェーブルに

よればエゾテリスムの基本要素は四つ、

一つは照応、あるものとあるもの間に

類似を見つけることで、一方のものから

もう片方のものを読み解こうとすること。

一つは生きている自然。自然の中に偏在

する神を見つけようとする事。

一つは想像力と媒介、呪術性を帯びたモノ

を介して神的な存在に働きかけようとする

こと。そして最後の一つは変成の体験。

あなたがたヘルメス学派を見ていて私は

これらがびったり当てはまると思いました。

カードを媒介とし、その予測できない動き、

いわばカオティックな自然の中に動きを規定する法則を見出そうとすること、そのために様々なデッキのアルカナ配置の照応に着目すること、ギルドのメンバーに大アルカナのホーリーネームを与えること。これも一つのエゾテリスムの推理ですね」

島本「よく勉強してる」

御田寺「さて本題です。19世紀のオカルティストの中にはユダヤ神秘思想、いわゆるカバラに基づいてタロットを解釈する一派がいました。彼らはタロットのアルカナをカバラの象徴図であるセフィロートの木に当てはめました。セフィロートの木を構成するヘブライ文字22字とタロットの大アルカナ22枚に照応を見たわけですね、ちょうどそんな形ですね、セフィロートの木って」

島本の並べるアルカナはセフィロートの木を模した布置になっている。

島本「カードの裏にも描いてあるよ」

手札のカードの裏面を見せる島本。

御田寺「そのセフィロートの木が表現する

ものは神の身体としてのこの世界そのもの  
ですが、人間が解脱に至る過程の図とも  
解釈されることもあります。最下部のマル  
クトから最上部のケテルまで10の天球、  
これはいわば神の属性を10に分割した  
ものですが、解脱への過程の図とした場合  
にはその一つ一つが修行者が通るべき魂の  
ステージということになります。パスと  
呼ばれる22の通路を経由してマルクト  
からケテルまで登っていくことで人間は神  
の世界に到達できるというわけですね。  
22のパスにはそれぞれヘブライ文字一文  
字の名称と順番があり、最上部ケテルに  
近い方からアレフ、ベス、ギメル、ダレス  
と続いて……私が言わなくても、島本さん  
は知っていますよね。神秘主義的タロット  
解釈においてセフィロートの木の最上部ケ  
テルに最も近いパス、アレフに対応する」

御田寺「大アルカナはマジシャンです。一般的なタロットでは22の大アルカナの中で最も重要なポジションを占めるのは21番目の世界、ワールドであるにも関わらず、ヘルメス学派のリーダーとして島本さんがマジシャンを名乗っているのは、島本さんこそ神の世界へ人々を導く存在であるとギルドメンバーに思わせるためなのではないですか？」

盤面を見ていた島本は顔を上げて、呆れたように笑い出す。

島本「攻撃するけど、ブロックしますか？」

御田寺「ブロックしなくていいです」

島本「だいぶ不利になってしまっうけど」

御田寺「どうぞ」

島本「へ見境のない殉教者」で攻撃して、

タワーをもらいます。時禱書の条件を

達成したから墓場のカードを全て手札に加

える。いいですか？ 秘術、使います？

〈異端反駁〉でも使わないと次のターンの

総攻撃でたぶん負けちゃうよ」

御田寺「どうぞ」

島本「不思議な人だなあ」

御田寺「私には島本さんの方が不思議です。

なんでそんなバカバカしいことを信じられるんだろうって」

島本「信じてるわけないでしょう。そんなの

あなたの妄想なんだから」

御田寺「ええ、実は私もそう思いました。

きつとギルドを利用した市場操作を正当化するために、あるいは単に居場所としてのギルドを維持するために持ち出した方便なんだと思います。至高の存在に近づくための試練、とかなんとか言ってます。

でも方便は、いつの間にか方便ではなくなった。カルトとはそういうものです。

照応、生きている自然、想像力と媒介、変成の体験。石工ギルドが独特の思想体系を有する秘密結社に変貌したと語られるフリーメイソンのように」

御田寺「島本さんたちも小銭稼ぎとは別の

ことを志すようになりました。これは本当に奇妙な論理で、私にはどうしてそれらが関連するのか理解できません。でも恐らく……あなたたちヘルメス学派は塔の崩壊を信じているんです。塔、タワーのアルカナはバベルの塔の崩壊を意味します。ジャック・ジメントが意味するものは最後の審判です。そして最後の21番目のアルカナ、ワールドは新しい世界です。こんな風に不平等や争いのない調和の取れた新しい世界が塔の崩壊と最後の審判の後に待っているんです。掛札さんから奪い取ったあのマンションの一室から見えるスカイツリーが、あなた達にはそんな風に見えるのではないのですか？　そしてその願いが成就するように、あのマンションにセフィロトの木を作り上げようとしたのではないですか？」

○マンション・ミキ家（夜）

タバコを吸っているミキ。

部屋から出て行こうとしているヒカル。

ヒカル「もう二度と来ねえから。死ね」

○同・10階廊下（夜）

ジョギングに出ていた酒井が1006号室に戻ってくる。

○同・6階廊下（夜）

コンビニ袋を手に603号室に入って行く浦沢。

○同・窓側からの外観（夜）

まばらに点いた明かりが増えていって、やがてセフィロートの木の形になる。

○カードショップ（夜）

御田寺「ギルドメンバーの一人一人が自分の

アルカナに対応する部屋に住むことで。

なぜなら」

× × ×

フラッシュ——

マコトとヒカルの会話。

マコト「603号室、そういえば新しい人  
入居したらしいよ。怖くないのかな、首  
つり自殺の事故物件なんて」

× × ×

御田寺「吊された男、ハングドマンです。

無理がありますよね。逆さ吊りじゃないし。  
でもオカルティストは、無関係なものに  
際限なく照応を見出してしまふんです。  
どこからかそのことを知ってあなたたちは  
確信しました。あのマンションの名前は  
なんですか？ ツリーライフ月島です。  
セフィロートの木は旧約聖書の生命の木  
から派生した概念です。掛札さんの娘の  
名前はなんですか？ ヒカルさんです。  
カバラでは世界はエン・ソーフと呼ばれる  
神性から流れ出たものとされ、従ってその  
世界図であるセフィロートの木はエン・

ソーフで満たされていると考えられていますが、エン・ソーフの語が意味するものは無限のもの、もしくは無限の光です。

だからあなた達は掛札さんの部屋が欲しかったんです。様々な手を使って彼らを追いつめ込む必要があったんです。あの部屋があなたたちにはタロットが予言する光の世界への入り口に見えたんです。

実は私も未来が読めるんです。私の見た未来を言いますでしょうか？ 何も起きません。

タワーは崩壊しませんし光の世界も到来しません。でもきつと、ギルドのメンバーは信じることをやめることができません。

それは自分たちの今までの努力とギルドで得た特別な自分という存在を否定することだからです。だから解釈の方が間違っていたと考える。選んだ場所が間違っていた、選んだ人間が間違っていた。そしていつまでも同じことを続ける。あなたもう逃げられませんよ、自分自身のマジックから」

間。

島本「君のターンだよ」

御田寺「ああ、すいません。ターンエンド」

島本「なにもしてない」

御田寺「いいですよ、どうぞ」

島本「投了する？」

御田寺「いいえ」

山札からカードを引く島本。

盤面と手札を交互に見る。

手札の使い魔をすべて場に出す。

島本「秘術は？」

御田寺「あ、大丈夫です」

島本「攻撃したら君の負けだ」

御田寺「はあ」

再び盤面に視線を落とし、それから

御田寺の手札を眺めて考え込む島本。

島本「……」

島本、山札に手を置く。

御田寺「あれ、なんで攻撃しなかったんです

か？ 攻撃してたら勝ってたのに」

島本「そのアルカナ配置ならヘグノーシスの声〱が出せる。こっちが一斉攻撃したら使い魔を奪われて逆転される。一体ずつで攻撃しても時禱書の条件が達成できないからデメリット効果でジリ貧だ。惨めな負け方はしたくない」

嘲笑する御田寺。手札を明かすと、そこには大アルカナしかない。

御田寺「そんな高いカード持つてるわけないじゃないですか。裏を読みすぎましたね。読んだって何もありませんのに」

カードを片付ける御田寺。

ふてくさされている島本。

ふと壁に貼られたリーグランキンクに目をやると、21位までのランクの番外に御田寺の名前がある。

島本「番外。フルルか。フルルはワイルドカードだ」

店を出て行こうとする御田寺に、

島本「お前誰だよ」

御田寺「お前に壊された誰かの知り合い。

てかお前こそ誰なんだよ」

島本「どこにでもいるつまらない貧乏人  
だよ」

○アパートの一室（朝）

マコトが仕事から帰ってくる。

欠伸をすると万年床に倒れ込む。

すぐにマコトの鼾が聞こえてくる。

○同（夜）

テレビを見ながらカップラーメンを

食べているマコト。

○その外（夜）

ゴミ袋を持ったマコトが部屋から出てくる。ゴミ捨て場にゴミを捨て、出勤。

○コンビニ（夜）

レジ番をしているマコト。

店内は閑散としている。

マコト「いらつしやいませー」

と、イートインからやかましい、楽しそうな学生の声。

マコトが目をやると、そこにはグレモリアの対戦をしている男子学生が二人。マコトはつかつかと二人に歩み寄ると、マコト「お客さんすいません」

マコトを見る二人に、マコトは壁の貼り紙を指し示す。

〈カードゲームなどお食事以外の目的でのご利用はご遠慮下さい〉

○アパートの一室（夜）

うさなれて眠っていたマコトが突如、目を覚ます。慌てて時計を見る。

○その外（夜）

部屋から走り出てくるマコト。

○コンビニ（夜）

レジに立っている韓国人バイトがマコトを見てキョトンとしている。

バイト「今日のシフトは私ですけど」

マコト「あれ、今日何曜だっけ、そうか、

ごめんごめん。寝ぼけてた」

ふらふらと店を出て行くマコト。

バイト「お疲れさまです」

マコト「お疲れさまです」

○その外（夜）

マコトが店から出てくると店外ゴミ箱を漁っているホームレスがいる。

何気なくマコトが目をやると、ハーミット。二人は束の間、目が合うが、やがてハーミットはマコトに背を向け去って行く。

○繁華街（夜）

あてどなく歩いているマコト。

通りかかったファミレスの窓を何気なく覗くと、テーブル席にミツルが一人でいるのが目に入る。  
立ち止まるマコト。

○ファミレス（夜）

グレモリアのカードを1枚1枚スリーブに入れてあるミツル。そこにマコトがやってきて向かいに座る。

マコト「店内でカードゲームは禁止だろ」

ミツル「ゲームはしてない」

マコト「あっそう」

間。

マコト「仕事は」

ミツル「ウェブプログラマー兼デザイナー」

マコト「大変？」

ミツル「激務」

マコト「そっか。お母さんと妹は？」

ミツル「適当にやってんじやないの。知らないけど。忙しいし」

マコト「だったらグレモリアなんてやめちやえよ。どうしてまた始めたんだ。そのうち俺みたいになるぞ」

ミツル「なるか。息抜きだよ。やってる間は仕事のことも忘れられる。俺にとっては大事な居場所だ。何の用？」

マコト「何の用もないよ」

ミツル「何か頼もうか？ おごるけど」

マコト「お前の施しなんか受けたかないよ」  
間。

マコト「それ、新しいエキспанションのカード？」

ミツル「ああ」

マコト「ちよつと見てもいいか？」

ミツル「ああ」

ミツルのカードを手取るマコト。

○店の外から窓越しの店内風景

そこに御田寺がやってきて、ミツルの隣に座る。

マコトは一瞬だけ御田寺を見て、すぐ  
にまたカードに視線を落とす。

御田寺もミツルのカードをあれこれ  
手に取って眺めてみる。

(了)

【参考文献】

『タロットの歴史 西洋文化史から図像を

読み解く』著・井上教子 山川出版社

『オカルティズム 非理性のヨーロッパ』

著・大野英士 講談社選書メチエ

